

紅魔館連続殺菌事件

著・イラスト

FALSE



知らなくても困らない登場人物紹介



フランドール・スカーレット

ご存知、悪魔の妹。

なぜか「友達」作りにこだわり、ぬえとこいしを巻き込んで地下の実験室で研究に勤しんでいる。

紅魔館の魔法使いに師事して知識は豊富だが、ヒステリー持ちで時おり手段が目的を破壊するのが珠に疵^{マッド}な狂気の妹君。

封獣ぬえ

ご存知、平安の大妖怪。

命蓮寺の勤行をサボって外をうろついてたときにたまたまフランに拉致られ、以来ずっと助手の扱いに。

モノを正体不明にする使い魔を無数に操るが、使い所が難しくフランとこいしからはよくヘタレ呼ばわりされている。



古明地こいし

ご存知、古明地姉妹の自由なほう。

気配を消すどころか存在すら忘れ去られる無意識の怪物。ふらりと現れてはその場を引っ掻き回してまた消える、ジョーカー的存在。

しかし気まぐれに持ってくる「地霊殿の黄金」は、常に資金難にあえぐフランの研究の貴重な財源である。



知らなくても困らない謎タイムチャート

公式 時系列	本巻 収録作品	別巻
星蓮船		私平安の大妖怪だけ ど(略)
	森の三魔女、自我を語る	
神霊廟		紅魔館に森が来た
	紅魔館連続殺菌事件	
(この間に若干量の、時間の隔たり)		
天空璋		
	こいここ失踪事件	

目次

森の三魔女、自我を語る……………	7
紅魔館連続殺菌事件……………	59
こいここ失踪事件……………	149

当作品は ZUN 氏が制作している「東方プロジェクト」シリーズの二次創作作品です。

本作における、人物・団体は原作に必ずしも一致するものではありませんので、あしからずご了承ください。

森林の三魔女

自我を語る



「これもやっぱり失敗作だわ」

フランことフランドール・スカーレットは床を踏み鳴らす。ヤツがもたれかかった作業機が微震を起こし、居並ぶ試験管どもが迷惑げにカタカタカタカタと騒ぎ立てた。

ヤツというか、私らの目の前には直立不動の金髪少女が一人いる。そいつは私とフランと、それから椅子を後ろ前にして背もたれを抱えた古明地こいしの三妖怪が取り囲んでるにもかかわらず、直立不動でうすらほんやりとした顔をしていやがった。

こいつはフランが作った「友達」の習作品。かれこれ五人目になる。今んとここいつを含めた友達は、作者の煮えた脳みそから火元を取り除くに至っちゃいない。

私はフランのテンポに耳を傾けながら、言葉を選んだ。ここであまり気休めにならない言葉を選んじまうと、あとでフランと通算三度目の弾幕ごっこに臨まにゃならん。

「うまくできてると思うんだがな」

トン、とひとときわ大きくローファーがカーペットを叩く音と同じくうちに、フランは深く、そして十秒は続いたんじゃないかってくらいに大したため息を吐き出した。

「上手にできてるのははた目だけよ。そしてそれは、いくらでも変えられる。わかってる？」

私はフランに向けて「待て」の仕草を見せて、秒単位の時間稼ぎを始めた。

「当然、存じて、存じておりますとも。不慮の事故が起これらんとも限らないから、吸血鬼特性は持たせず、しかもなるたけ力がない素体になるように調整もした」

「それだけじゃ先人の研究を超えられてないってのよ。私たちが目指さなきゃいけないのは、その先。はい、あなた。顔を上げてこちらを見なさい」

まだ名前もついてないそいつは、一拍おいて顔を上げ、フランを見た。なるほど、前の四体とまったく同じ返しときたか。せいぜいその動きが早くなった程度の違いだな。

なんか歯ざしりみたいな音が聞こえちゃった。

「いいこと？ 私があなたを作った者。私の言うことには従いなさい。いいわね？」

「はい、ごしゅじんさま」

そいつは淀みなくフランにそう答えた。見かけ相応に可愛らしいが、平坦すぎる言葉だった。フランも、そして私も望んじやいな返しである。

私がこのあとの作業道具を探す隙に、フランによる質問大会が始まった。

「右手を上げて」「はい」

そいつが石の天井に向け右腕を伸ばす。フランはしばらくそいつを眺めたまま、腕を組んだ。「右手を下ろして」「はい」

そいつが右腕を下ろして元の直立に戻る。フランは目を細めて腕を解いた。

「これから手を叩くから、それに合わせて歩きなさい。はい、一、二」

フランの手拍子に合わせてそいつが歩く。フランの目の前、あと一歩踏み出せばぶつかるところまで来て、柏手が止まった。

そのままフランとそいつが向かい合うこと数秒。フランはふいっと表情を消すと、机の上の散らかった羊皮紙やら本やらの山をばさばさと漁った。

そうして探し出したのが、なんの変哲もない一本のナイフだ。

「これを持って」「はい」

「もう一度手拍子をするから、今度は後ろに下がりなさい」「はい」

私は黙々とそいつの後ろに汚れたシートを広げた。赤に赤が重なっていい加減に黒い。

手拍子に合わせてそいつはシートの上に乗る。その真ん中にさしかかったところでフランは手を止めて、まじまじとそいつを見つめて息を吐いた。

「質問をするわ。そのナイフであなた自身の喉を突くと、どうなるかしら？」

「血が出て、死にます」

回答に、何の迷いもありやしねえ。なんか私も手足がずっしり重たくなってきた。

こんなもん作っちゃまって、何が楽しいというのだろう。

そしてフランはいよいよ顔を凍らせて、そいつに最後の命令を下した。

「じゃ、次いつてみましょうか……今すぐそのナイフを使って、自らの喉を貫きなさい」

そいつが答えを返すのに、コンマ一秒とかからなかった。

「はい」

やれやれ、私はそいつに歩み寄った。

残った処理をフランの分身どもに任せると、私は手足の汚れを拭き取りながらフランの様子をうかがった。ヤツは椅子に座り込んで脱力し、首だけ上に向けて天井を見上げていた。

さてと頑張りどころだ……私は手近なところにあった椅子を持ち上げて、なるたけ音を立てずにそいつをフランの隣まで持って行って、席に着く。

状況は私にとっちゃ少なくとも最悪だ。実験の失敗続きでもってフランのご機嫌はより極端から極端へと触れるようになっていく。私は目下、ヤツがブチ切れて暴れだすか、自信を失い思いつき泣きつかれるか、はたまた新たな解決策を思いついて徹夜必至の狂喜に溺れるかのいずれに振れるかを見極める必要に迫られていた。

そのどれになつたとしても、私は一つの重大な問題をフランにそろそろ突きつけにやららん。「ねえ、ぬえ」「おう」

かつてない反応。生返事を返しつつ頭ん中はぐるぐると忙しい。「今のペースで、あとどれだけプロトタイプを造れると思う？」

……後先を考える理性が残ってた。偉い。度重なる失敗がフランをかえって冷静にさせたのかも知らん。私は二、三度咳払いして、前もって計算しといたその数字をもったいぶった。

「そうだなあ。今のペースならせいぜい五、六体つてところか？ あんまり欲張ると錬成装置を動かすのもままならなくなるかもな」

フランは体を折り曲げ、机に突っ伏する。散らばった羊皮紙がヤツを支える布団の代わりになってガサガサ鳴った。そのままの姿勢で人差し指で机を打ち鳴らす。

「世知辛いつたらないわね。お姉さまに頭を下げないと駄目かしら」
フランの爪が古びた机の表面をがりりと削る。

「相変わらずお嬢さまはテメーの道楽以外に財布の紐が硬いから、難しいんじゃないかね？
あとはうちのパトロンの気まぐれに期待するしかないんだが」

駄目元で後ろの様子をうかがう。こいしは椅子の向きを元に戻し、膝の上にお行儀よく両手を置いて若干体を横に傾け、彫刻みたいな笑顔をこちらに向けるばかりだった。

今んとこあいつが持つて来た「地霊殿の黄金」が私らの研究の原資になってるわけだが。

「あの様子だと、あまり期待しないほうが良さそうだ。無意識の女神は、も少し将来性のある研究にこそ投資したいとお考えらしい」

フランは頭を抱えると、そのままナイトキャップ越しに髪をわしゃわしゃやった。

「手詰まりだわね。下手な鉄砲も数撃ちや当たると踏んでいたけれど、どうやらそうでもないみたい。ちゃんと自我が植わった友達を造るには、なんか別のアプローチが必要なんだわ」
そしてそのまま、フランは口元でなんぞ呪文みたいな言葉を呟く機械になってしまった。

私は背もたれに体を預けて、動かなくなったフランを眺めた。思い悩むフランに対して私としてやれることは大して多くない。何しろヤツの研究は高等過ぎて、この研究室に放り込まれて数ヶ月かそこらの私にゃ単語を拾い読みするくらいが精一杯だからだ。

「だいたい先達も数撃って当てたんだろう？　だとしたら思いつくのは」
「そうよ、先人の知恵！」

どん、と机を叩いた勢いでもって机の上の資料が小さく跳ねた。起き上がったフランの目は、私がある種の寒気を感じてしまう程度に鋭い。

またぞろ何か、ろくでもないことに巻き込まれる前兆だった。

「お姉様に頭下げるのは、最後の手段！　まずはパチエに心当たりがないか、聞いてみよう。今ならあんまり邪険な扱いを受けることもないはずよ」

こうなった時のフランはとにかく動くのが早い。例えその行き先が、どんなにゴールとかけ離れたものであってもだ。だから野放しにしておく、と、どんどん間違った方角へ突っ走る。

「そうと決まれば早速直談判に行くわよ。さあ、私たちの輝かしい未来のために！」

「わかったからせめて腕を引いてくれ」

片鉄の右翼を引っこ抜かれまいと、私は立ち上がったフランにどうか歩調を合わせていく。そう、間違った方向に飛び出したフランの舵を、持って生まれた天災的頭脳でどうにか正し、しかるべきゴールへ導き直してやるのが紅魔館に放り込まれたこの私、封獣ぬえに与えられた

使命つつか、試練であると言える。

……ちゃんと直せるといいなあ。そんな願いをフランに届かせる以前に私は体のバランスをとりながら走るのに必死にならざるを得なかった。

§

「私も試行回数 of 末に成功例を見出したくちだし、そこで研究を止めてしまってもいるから、あなたたちの悩みに答えることはできないわね」

パチュリー・ノーリッジは、本に目を落としたまま私たちに応える。ヤツがページをめくるのに合わせて、蔵書の森を照らす魔力灯がかすかに瞬いた。

予想できた回答ではある。私や手持ち無沙汰で、大森林じみて馬鹿げたでかさを持つ本棚の森に視線をやった。しかしこの日のフランはなかなかしぶとかった。本の山によじ登る勢いでもってパチュリーに顔を寄せる。

「そのときのこと、何か思い出せないかしら？　どんな小さいことでも構わないから」

パチュリーは軽く息を吐き出し、目を閉じた。

「五桁に及んだサンプルの中でも、自律的応を示したケースは二桁に届くかどうかだったわ。同じ条件で育成したサンプルがいくつかあったにも関わらず自律したものはほんの一部。私の

目が及ばない範囲で、何らかの偶発的要素が働いた可能性は極めて高いと言えるわね」

フランは本の上で拳を作った。

「私、それを見つけないの。パチュエと同じやり方じゃ、多分たどり着けないわ」

「資料には穴が開くほど目を通したのでしょうか？ あなたには新たなインプットが必要であるように思えるわ。自我についてちょうど似たような分野を研究している魔法使いがいるから、会ってみるといいわ。紹介状を書いてあげるから」

フランはついに本の上によじ登った。

「そんなの、いるの!？」

「本が傷むから、もう少し落ち着きなさい。助手もサボってないで仕事して」「へいへい」

私は後ろからフランの肩を抱える。

「そいつの名前はアリス・マーガトロイド。魔法の森に居を構える奇矯な人形使いよ」

「魔法の森なんてずいぶんストリートな地名ねえ」

パチュリーは口元を少し歪めながら本を閉じ、羽ペンを手にとった。

「魔法の森はあくまでも俗称。私はある場所、とうてい近づく気にはなれないね。そいつはそんな場所に引きこもって、人形を作り続けているわ。自律する人形をね」

「自律する人形！」ばたつくもんだから、支えるこっちは大変だ。「とても興味深いわ。その研究は、どの程度進んでいるのかしら」

パチュリーは流れるような動きで便箋にペンを走らせた。

「私は他人の研究になんて興味がないから。実際に会って確かめてみるといいわ。それから」
封筒に蠟を垂らしながら顔を歪める。

「例の本泥棒、白黒もあそこに住んでるわ。見つけたら文句の一つも言っといてちょうだい」

§

魔法の森の中は、霞のような煙のようなものに覆われた原生林だった。しかしながら、その森の中に漂う白いものが結露した水蒸気なんて単純なものじゃないことはすぐにわかった。

「なるほど、こいつはあの喘息持ちが近づきたがらんわけだ」

真水で濡らした布で口元を覆いながら私らは歩く。ついでに言うのと、荷物がすこぶる重い。

紅魔館から大して距離は離れてないはずなのだが、行商みたいな大荷物を背負わされている。

森のそこかしこには派手な色をしたキノコが顔を出していて、そいつが時おり白いなんかを吐き出しているのだ。モヤモヤの正体は毒キノコの胞子というわけだ。

なんで毒キノコとわかるかって？ 毒じゃないわけなからうが、あんな極彩色したキノコが、まともに吸い込んだらむせるどころか、見えるはずのないものが見えたり聞こえないはずのものが聞こえたり、あげくもつとひどいことになるに決まっているのだ。こんな場所で魔力を手

に入れられると考えてる魔法使いどもの気が知れない。

「よかつたわね。親切な人が地図まで書いてくれて」

と、それにもかかわらずフランの声は弾んでいたし、物理的にスキップまでしてやがった。もうまづい瘴気を吸ってしまったか、それともヤツ自身が魔法使いに片足突っ込んでるからか。ちなみに「親切な人」というのは森の入り口に店を構える奇特定の骨董品屋のことだが、商人の例に漏れず屁理屈の上手い野郎で信用に足るかは未知数だ。

だが今回に限っては杞憂だったらしい。前に行くカインドが生い茂った低木を薙ぎ払う先に、小さな白い洋風建築物が現れた。魔法使いの家にしちやぜいぶんと普通だ。少なくとも梁やら壁やら奇妙に歪んだ欠陥建築や、全部お菓子でできてる家ではない。

「あれで間違いなさそうね。さっそくお邪魔してみましよう」

フランが歩調を早める。するとそこらの茂みがガサガサ鳴って、何か私らの前を遮った。

正体は私らの頭ほどにも満たない西洋人形が二体。なんの支えもなく宙に浮かぶ。中世騎士の馬上槍みたいなのを抱えて、その穂先をこっちに向けていた。人形の表情は読めたもんじやないが、あんまり友好的に見えないのは確かだ。

にもかかわらずフランは目を丸くして、そいつらをしげしげと見た。

「さすがは人形使いの家ね。ガードマンも人形みたい」

とかなんとか言いつつ、穂先に触れようとしゃがる。おいおい家主の機嫌を損ねかねんぞ。

止めるべきかと手を伸ばしかけたその手前、新しい声が飛んできた。私らの、後ろからだ。

「その子たちは、近づく者を攻撃するよう命じられているわ。通らないほうが身のためよ」

見ると青いワンピース赤いヘアバンドの金髪の女が、こっちに向かってくる。手にはでかいトランクケースを持って、肩のあたりにはわかりやすくもガードマンとよく似た感じの人形が着いてきていた。なるほどこいつが人形使いのアリス・マーガトロイドか。

そのアリスが、私らに近づくにつれ歩くペースを緩める。ほんの一瞬、ヤツの指先から赤い紐じみた魔力の筋が、人形に向かって伸びたように見えた。

「こんな森の奥にどんなご用事かしら？ 興味本位で入り込んで、迷子にでもなったの？」

……あからさまだなあ。まあこつちから押しかけたみたいなものだし、仕方ないのか？

しかしフランの動きは素早かった。突き飛ばす勢いで私を押しつけてアリスの前に出ると、スカート裾をつまみ上げて仰々しい会釈を見せた。

「突然ごめんなさい。あなたがアリス・マーガトロイドね？ 私たち、あなたに会いにきたの。

紅魔館のパチュリー・ノーリッジの紹介と言えば、わかるかしら」

「あの図書館が？ かく言うあなたも、紅魔館の吸血鬼のようだけれど」

アリスはそこで、私らの背後に目をやった。私らの後ろには、カインド三人が控えている。そしたらどうだよ、俄然としてヤツの目が輝き始めたね。

「あなた、面白い使い魔を連れてるのね？ 使い手と全く同じ姿なんて」

フランもここぞとばかりに饒舌になつて。

「あら、わかるの？ まあ使い魔といえはそうかしら。ちよつと燃費が悪いけれど。私専用の生体ゴーレム、と言えばわかりやすいかな。教えたことはきちんとなせ、いい子たちよ」
アリスはようやく私らに近づき、そして通り過ぎた。

「ここでの立ち話はあまりよくないわね。中でお話を聞きましようか」

見張り人形どもが、門を開けるみたいに左右へ分かれ道を開いた。と、そこでアリスが私らの横手、庭の一角を指差す。少々引きつった頬を私らに向けながら。

「あと、向こうにいるのはあなたたちの知り合ひでいいのかしら」

こいしが人形三体ほどにシャツとスカートの裾を地面に縫い付けられて、じたじたしていた。ああ、いたな。そういやいたなあいつ。相変わらず存在を忘れ去れることが得意なやつだ。

「正しい認識ね。ちよつと行動がフリーダム過ぎるのがアレなのだけれど」

「まあ知らないやつでもないからいいけれど。じゃ、着いてきて」

§

中に入るや、私らはアリスの人形使いとしての芸当をまざまざと見せつけられた。

家の奥から現れた人形どもがアリスのトランクケースを受け取り、また別の人形がブラシを

担いで現れると私たちの服にまわりついたキノコの胞子を払い落とす。そのまま客間に入っていくとまたまた人形どもがメイキングを済ませて待ち構えており、長椅子に座って待っているとティーセットをかついでやってくるのもまた人形である。

フランはその人形一つ一つの動きを眺めてまわった。その様子や初めて平安の都に足を踏み入れた、農村育ちのお上りさんみたいだ。

「この子たち全部を操ってるというの。糸も何も着いてないのに」

「厳密には『魔力の糸』でみんな繋がっているわ。絡まったりしたら、困るでしょ」

アリスが私たちの向かいに座る。パチュリーの書いた紹介状をひらひら振って、私らを見た。

「あなたたちの用件は理解したわ。私の研究について知りたいと言うのね？」ゆっくりと足を組む。「アプローチの仕方があなたと私でまるで異なるけれど、果たして参考になるのかしら」ティーカップが揺れるのお構いなしに、フランが身を乗り出す。私はアリスに嘸みつかんようにそいつの肩に手を添えた。最近こんなばっかりだな。

「分野は違えど、目指す方向性には通じるところがあると思うわ」

アリスは口元に手を当て、私らを見たまま黙り込んだ。

「見せてもいいけれど、二つほど条件を挙げさせていただくわ。魔法使いが魔法使いに自らの技術を見せるのですもの。それなりの対価を支払ってもらわないと」

フランは口の端を吊り上げた。

「ええ、わかってるわ。こちらの研究内容を開陳しろというのね？」

「話が早くて助かるわ」

魔法使いどうしの取引ってやつだ。道理ででかい荷物を運ばせてくると思った……フランのやつ初めからこういう取引をすること前提で準備してたんだな。

「ここ最近のレポートを持って来てあるわ。好きに見ていただいて構わないから」

「ええ、それもいいけれど。さし当たっては後ろにいる子たちを少々調べさせてもらいたいもの。後ろの子というのはもちろん、ソファアールの後ろに控えた三人のカインドのことだ。」

「この子たちは私の制作物じゃないけれど、大丈夫？」

「問題ないわ。同じ思想で作られてることくらい、わかるから」

言ってアリスは立ち上がり、カインドたちの後ろに回り込んだ。

「カインド、警戒を解いて」

フランが口添えするそばからアリスはカインドの腕を取って、その感触など確かめている。

「筋肉の構造とかは人妖と大差ないのね。この子たちはあなたの命令しか受け付けないの」

「肝心の自我が抜けているのよね」

「なら、よかった。ちょっと背中を借りるわ」

カインドの真後ろに立ち、指を背中に走らせる。フランはその様子に、首を傾げていた。

「何をするつもり？」

「この森で生きるための知恵を少々、ね」

そのまま指で紋様を描く。最初は大きな円、三角形を二度、そしてより細かい文字のようなものをちよいちよいと書き込んでいく。パチュリーが使うのと同じ、西洋魔術の類いだろう。しかし私は、そこいらの知識にはとんと疎い。まあフランがまじまじと見守るだけで手出しをしないうちは、特に悪意のあるもんでもなからう。

そうこうしているうちに、アリスが指で描いた軌跡が青白い光を帯びだした。そいつはしばらくカインドの背中であく光り続けると、吸い込まれるように消えた。

アリスは軽く息を吐き出すと、カインドの背を軽く叩く。

「魔力よけのまじないを施したわ。数日はもつでしょう。他の子たちにも同じものが必要ね」
フランは口をへの字に曲げて、カインドの背中に触れてみる。

「この子自身の魔力を縛るものではないみたいね。どんな魔力を避けるものなの？」

「ここに来るまでの間に、あなたたちも体験したと思うのだけけど」

体験といやあ、心当たりなんてたつたの一つだ。私は思わず口を挟んだ。

「要するにキノコのことか。毒ってたつて所詮はキノコだろう？」

「マジック・マッシュルームとは言ったものでねえ。中には本物の魔力を放出し、触媒として使われるものすらあるわ。人の形をしたものは、特にその影響を受けやすいの」

「カインドがそうだとどうなのね？ 影響を受けると、どうなるっていうの？」

アリスは薄笑いを浮かべると、両手を胸の前まで上げてにぎにぎとやった。

「狂うわ。この子たちのパワーだと、どれほどの影響があるかしら」

……確かに。こいつらが狂ったあとの後始末のことを考えたら、身の毛もよだつな。曖昧な笑顔の私らを置いて、アリスは勝手に話を進めだした。

「それであなたたち、研究の視察なんて一日やそこらで終わるようなものじゃあないし、私もレポートを読み込む時間がほしいわ。空き部屋を作るから泊まっておいでなさい。三人プラス使い魔三ではちよっと手狭かもしれないけれど」

フランの周りに花でも咲いたかって勢いでヤツは目を輝かせた。

「いいの？」

「ええ、資料も自由に閲覧していただいて結構よ。二つ目の条件を飲んでいただけののならね」

(以降「偽者の脳内」にてご確認されたし)



森の三魔女、自我を語る

初出 平成二十九年博麗神社秋季
例大祭／第十三回東方紅楼夢
(二〇一七年一〇月)

紅魔館連続殺菌事件



紅魔館の裏庭に設けられた墓地に、新たな穴が穿たれた。

紅美鈴ホンメイリンが掘り起こしたそいつに、棺桶を運び込む。その蓋が一度開いて、亡骸が白日のもとにさらされた。黒いワンピースに身を包んだそいつの目が、もう開くことはない。

手向けの花が降り注いだ。フランドール・スカレットが花びらを千切り、目を細める。

「ああ、志半ばにして散ってしまった我が同士ぬえ。八方手を尽くしたけれど、あなたの命を救うことはかなわなかったわ」

棺桶の亡骸が花びらで埋まって、元の体が見えなくなった。

「しかし私たちは立ち止まることはない。あなたが残した成果をもって、必ずや私たちの悲願は達成されることでしょう。どうかそのときを、そこから見守っていてちょうだい、ぬえ」

「惜しい者を亡くしました……!!」

美鈴がスコップを地面に突き立てる。その目には光る涙が溢れていた。

「一つ質問、いいかな」

そこで私はたまらず、手を上げた。

「なんでまた、死んだ実験体に私の名前をつけようと考えた？」

葬列に加わっていた、私こと封黙ぬえが。

そう、これは葬儀だ。その辺は間違いない。

しかし地面に開いた穴は、私らの頭だつて入りやしない。棺桶だつてそれ相応だ。それもそのはず、棺桶に入った亡骸は十センチかそこらの小人でしかない。

こいつらは、私らが「実験体」と名前をつけた仮初めの命だ。新たな「友達」造りを目指す狂気の妹ことフランの研究で生まれた副産物。三頭身くらいしかないのを除けば、人間と大差ない。しかし、肝心の魂がこいつらにはこもっていない。

「だつて、死んでも実験体なん号ここに眠る、じゃあ味気ないじゃない？ だから死んだときくらい、ちゃんと名前をつけて呼んであげてもいいかなつて」

「だからといって、戒名に私の名前をつける理由はないわな？ 庭師もいちいちフランのノリに流されるんじゃないよ」

「いや、妹様がいつになくシリアスな気を流していたので乗らないといけなのかなと」

「そうよぬえ、厳肅な式典に水を差すものではないわ。そろそろお別れしましょう、美鈴」
「かしこまりました」

棺桶に蓋をかぶせてスコップ一人分の土をかぶせれば、埋葬はおしまいだ。上から「偉大な実験の礎となった実験体五十七号ここに眠る」と記した墓石を乗せて、墓を整える。

そのすぐ隣には、すでに三十余となった実験体の墓石が並んでいた。

「では美鈴、墓を荒らす不届き者が現れないか、しっかりと見張ってちょうだいね」

「お任せください」

墓地を出る。つってもそこは、日当たりが悪くて花を咲かすには向いていないちよつとした庭園の隙間に過ぎない。広さにしておおよそ三坪あるかどうか。

私は後ろ手で頭を支えて歩く。隣をうかがえば、並んで歩くフランに表情がない。こういうときのこいつは、なにを考えてんのか読めねえ。さりげなさを装って、言葉を選び取った。

「あそこにはあと何人くらい葬れると思う？」

「どんなに詰めても、十人ちよつとつてところかしら。そのあとは、共同墓地でも作るほかにないわね。どんなに生き永らえたとして、いつかは土に還さないといけない子たちよ。でも、それにしたって」

フランの顔が、こつちを向いた。左右の眉毛が観測史上限りなく中央方面に寄っている。

「今生きてる子たちを、おざなりにするわけにはいかないわ。あの子たちから取れるデータもあるのだから。ぬえもなんか知恵を絞りなさいな」

「知恵を絞れたって、そもそもあいつらもお前の頭ん中から出てきたアイデアだぞ」

地下図書館に向かう間に、おさらいだ。あの実験体どもは、魂のこもった「友達」の試作品として造られたものだ。作成コストは人間大のものを作るより、はるかに低く押さえられた。そいつは当初、画期的なアイデアに思えたんだ。私らは常に資金難にあえいでいるからな。

だが、当然デメリットもあった。ヤツらは病原菌とかのたぐいに對して、すこぶる弱いのだ。いろいろな手違いがあつて、魔法の森の菌類が研究室に入り込んだことがあつた。そんなときはまあ、いろいろと面倒なことになった。私ら妖怪は、怪我や病氣のたぐいに對し無駄に頑丈だ。だから実験体みたいな脆弱な命に對して、少々目論見が甘かつたと言える。

「今月に入つて感染症患つて死んだ実験体がもう三人。さすがに葬式ごつこも疲れてきたわね」
複雑怪奇なる通路を抜け、地下へ向かう階段にたどり着く。その折、フランがそうこぼした。
私らの「研究室」は、元は地下大図書館の主パチュリー・ノーリッジが建てたものだ。迷路になつた図書館を、決まつた順路で通り抜けた先にある。不便なので空間を操るメイド長に、フランの私室の隣へつないでもらうことも一度は考えられた。だが、その結果として館全体のパスをしつちやかめつちやかにされてはたまらんといいことで、お流れになつてゐる。

まあそんなわけでこの施設、実際に建てられたのは半世紀くらい前になる。私らはそのころの設備を使いまわしてゐるので、衛生的なあれこれについては最近まで無頓着だった。

「部屋の無菌化に、病氣にかかつた実験体の早期隔離。やるべきことは全部やつてるな？」

「研究室を建て直せば、いちばん手取り早いんだけれどね。お金はかかるし、お姉さまも自分の趣味に合わない部屋を増設するのにいい顔しないだろうし」

と、そこで不意にフランの歩調が速まつた。遅れまじと階段を滑り降りる。

「さては、なにか思いついたか？」

「そろそろね、私たちも本格的なマイクロ検査用の設備を導入するべきだと思わない？」

「マイクロ検査」

「そう、文字通りマイクロ単位の、細菌やウイルスといった微生物を見つける検査。それは防疫のみならず、さまざまな検査測量で役に立つはずよ」

「そしてまた傍流に逸れるわけだ……遅々として進まんな、研究は」

「大丈夫よ。今回の研究はいろいろと応用が利くから。それならうちの魔法使いも手伝ってくれるかもしれないわ」

階段を降りきり、扉にたどり着く。ばたんと開ければ、塔みたいな本棚が立ち並ぶ図書館が私らの前に広がった。すぐ目の前には山みために本が積まれたパチュリーの「書斎」がある。

「あら妹様、お帰りなさい。葬儀はもう終わったのかしら？」

書斎に顔を出すなり、パチュリーが声をかけてきた。書斎の中央にふんぞり返り、分厚い本に目を落としたままで。

「つつがなくね。それよりパチュエにお願いしたいことがあるんだけれど」

と、フランはパチュリーにマイクロ検査の全容を語り聞かせた。目えキラキラ輝かせながら。パチュリーはその間も、開いた本に目を落としたままだった。

で、全部を聞くと。

「資料は貸してあげられるけど、手は貸せないわね」

と、そう言い切ったのだった。本から全く顔を上げることなく。

「そりゃまたどうして」

「そんなものに携わっていたら、ますます読書のスピードが落ちちゃうじゃない」

パチュリーがページをめくる。本が相槌打ったみたく、ぱらりと鳴った。フランはそいつを見て、口を尖らせている。

「実験科学も必要と違う？」

「それは別の魔法使いがやればいいだけの話。それに、あまり踏み込んでよいものでもない。そういった、私たちの次元とは異なる幻想とはね」

フランが首をかしげた。

「どういうこと？」

「確かめてごらんなさい。経験することでもって、理解できることもあるわ。私たちが幻想をのぞき込もうとするとき、幻想もまた私たちをのぞいているのよ」

「どこかで聞いたような言い回しねえ」

§

そんなわけで、ミクロ検査を可能とするための魔力顕微鏡の開発が始まったのだった。

「初号機ができたわー！」

研究室に、新たな巨大設備が加わった。周囲では実験体とフラン^カの分身^ドが、万歳を繰り返す。私は泥だまりみたいで、そいつを見上げていた。魔術公式がびっしりと刻みつけられた銀色の筒に、これまた魔術式でもって版面板みたくなった銅板を組み合わせたみたいな物体を。なんなんだ、この感覚。

ページをめくった瞬間別のシーンが出てきて「あれ、間違えて二ページめくっちゃまったか？」と紙と紙の重なりを確認しに戻りたくなるようなこの感覚は、いったいなんなんだ。

「なんかメチャクチャあつさりしてねえ？」

私の言葉を聞くや、フランは私に逆三角形の目を向けた。

「なに言ってるの。ここまで来るまでに文庫三百ページ分くらいの一大大ドキュメントがあったじゃないの。地上の星を手に入れちゃうレベルの」

「……いや確かにそうなんだが……そのはずなんだが……おかしいな。なんかここにくるまで、ものの数行で終わっちゃまったような錯覚が……？」

「たいへんだったじゃないの。素材探しのために幻想郷中を飛び回った挙げ句に、ドラゴンと戦ってぬえが消し炭にされかけたりしてさ」

「結局地底に降りて稀少鉱石を鬼に譲ってもらって事なきを得たりもしたな、って、あれ？ そんな話本当にあったっけ……なぜそれを私は鮮明に語れるんだ……？」

なんかどこかで、偽りの記憶を植え付けられたような気がする。必死に真実を思い出そうとこめかみをつついていけると、背中をどしんと叩かれ強制中断させられてしまった。

「細かいことは気にすんな。それより試運転しましょう。まずはこのドキュメントにどれだけの雑菌が含まれているか試してみるわよ」

と、フランが透明シートで包んだ一枚の羊皮紙を取り出した。つい最近まで研究室に封印されていた、数多き実験資料の一つだ。今でこそ衛生上の観点からフランの部屋へ移しはしたが、それまでは半世紀近くこの場所で埃をかぶっていたものである。

「これを保護ケースに入れて、ケースの中でドキュメントを取り出してちょうだい」
「へいへい」

筒の下にガラス製のドーム状物体がある。こいつが保護ケースだ。そこに二つほど、腕の太さくらいの穴が空いている。ケースの内側からゴム手袋がその穴に結わえつけられていて、微生物を周りに散らさないよう作業できるといふ仕組みだ。

私は少し不器用になりながら、観測ステージの上に羊皮紙を置く。フランドールはその間に、顕微鏡に取りつけられた操作つまみをぐるぐるいじり出した。さっそく筒やら板やらに刻んだ魔力式が光を放つ。

銅板の光が不規則なノイズを発し、やがては何らかの映像にその姿を変えた。

どうやらこいつが拡大された羊皮紙の様子ということになっているらしい。映像の片隅には、

「X500」という文字列が見える。

「白と黒しか見えんな」

「いろいろ動かしてみるわ」

フランが手元の操作盤を、ガチャガチャといじる。プーンという微細な音を立てて、映像が右へ左へと動いていった。

「ほら、この辺になにか見えるわ」

映像の中では、白黒の粒が一团となつてうごめいている。倍率が「X1000」に上がり、それらの動いてる様子がより鮮明に映し出された。

「こいつはなんだ？」

「細菌の群れ、コロニーというやつね。小さくて弱々しいから群れを作つて身を守る。人間と大差ないわね。倍率を上げてみるわ」

倍率の数字が五桁になった。白黒の粒だったものが、もう形もはっきりわかるようになってくる。細長い、丸っぽい、いろいろと見える。

フランもまた、その映像に釘付けになっていた。その間も操作盤に手を置いて、コロニーに焦点を合わせることを忘れない。

「こうして見ると、なんだか一つの街を見ているような感じね」

そして、ふとそんな感想を漏らすのだった。

「細菌というのは、人間よりもずっと単純な生き物なんだろう？ 街など作るかな？」

「わからないわよー？ 何しろ、ここは幻想郷だしね。マイクロサイズの妖怪がいたところで、おかしくもなんともない……」

中途半端なところで、フランの言葉が止まる。拡大映像に釘付けなのはそのままに、眉毛を互い違いに曲げていた。

「どうした？」

「……この細菌、なにかおかしくない？」

と、映像の片隅を指差す。細菌の合間を、黒い影がふらふらと動いている……そいつは、どう見ても他の細菌と一線を画していた。

そいつには二本ほど、角みたいな突起物が生えてるのが見えた。本体に対して不釣り合いなほどそいつは長く、猛々しい。はて、どこかで見覚えがあるような……？

ブツン、と妙な音がした。同時に銅板に映し出された映像が大きく歪み、真っ暗になる。

私はフランを見た。当のヤツが銅板と操作盤を交互に見て、しきりに操作を繰り返している。

「もしかして、壊れたのか？」

「そんな馬鹿なことが。つい今まで普通に動いていたのよ。見てたでしょ？」

「そりゃー、見てたがな？ それでも壊れもするだろう？ 試作品なんだから」

「うーん、まいったな……」

操作盤から手を離し、そこいらを歩き回った。

「ぬえ、オーバーホールするわよ」

「え、今から？」

「故障の原因は早期に解明しておくに越したことはないでしょうが。いいから手伝いなさい」
言うが早いのか、フランは大装置に飛びついた。こうなっちまうと止めようがない。逃げたらあとで手酷い仕返しを食らう羽目になるので、手伝うしかないのであった。

魔法投影盤を外し、魔法拡大鏡を覆う術式つきカバーを外し、パーツの一つ一つを取り外して入念に確かめる。せっかく組み立てたものをもう一度解体せにゃならんとは、実に不毛だ。

その不毛な作業が一刻ほど続いたところで、原因が見つかった。

「……どういうこと？」

フランは拡大鏡の中枢をなす部品の一つを、ルーペでのぞき込んでいた。だが、そんなもんで見なくたって異常なのは明らかだ。部品に無数の亀裂が走っている。

フランはなお、その壊れた部品を眺めていた。亀裂の一つ一つをも調べようかという勢いだ。「実に、不可解な壊れかただわ。魔力的な負荷がかかったってこと？ それにしても、こんなに物理的な影響があるとは到底思えないのだけれど」

「あなたが壊したんじゃないかしら」

「は？」

青筋立てて振り返る。おなじみページジュのシャツに黒い丸帽子、古明地こめいじこいしがたたずんでいた。そういや、いたなこいつ。なんかずっと私とフランだけで悪戦苦闘していたような気がするが。こう見えて、研究資金の大半はこいつから出ている。あまり強く責められない。

「あのねえ、なんの因果があつて私のせいってことに」

私によつきり手を伸ばした。こいしのお陰で、一つの可能性に思い当たったのだ。

「私もこいしの意見に同意するな」

フランが牙をむいて、空気に裏拳を打ち付ける。

「ちょっと待て、なぜそうなる」

「だって、こんな理不尽な壊しかたができるのはお前の『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』以外に考えられんだろうが。お前、初めての映像に興奮して、うっかり『破壊の目』を潰してないと言いつけるのか？」

外からの衝撃で、拡大鏡の中枢部分にあるこの部品だけを壊すのは大した手品だ。フランは口をへの字に曲げて、自分の両手をわきわきやった。

「うーん……そんな感覚なんか、まるでなかったんだけど」

「まあ、前向きに捉えようや。試運転して、きちんと拡大映像が出るとまではうまくいった。故障した場所もはつきりしてる。部品交換すりゃ、もう一回動かせそうじゃないか。ここからまた三百ページのドキュメンタリーをこさえるのは、さすがに勘弁だからな」

【試作二号機、起動直後に停止。解体検査の結果、魔力集積回路に断裂が見つかる】

【試作三号機、軌道から三十五秒後、倍率一万倍に拡大中に停止。解体検査の結果、内部視界拡張魔術方陣に断裂が見つかる】

フランはレポートを眺める。コツコツ地面を踏み鳴らすのは不機嫌の証だ。

「どういうことなの……」

「どういうも何も、見たまんまの結果だわな」

私の言葉を聞くなり、レポートごと腕を振り上げ向き直った。

「故障発生箇所もタイミングもバラバラ。しかもありえないほど入り組んだ場所にある部品が壊れてる結果に、なにを納得しろというのよ！」

ぶっちゃけ逆ギレされても困るのだ。そもそもこんな、河童にでも聞いたほうが早い。

「少なくとも今のところは、フランがやったとしか思えない状況証拠が次々に積み重なってる結果だわな？ お前、本当に何もしてないって言い切れるのか？」

襟首つかまれ、私は不格好なシェイカーとなる。

「いくら私だって、無意識に破壊の目を潰すなんてことしな〜い！」

「落ち、着け、一張、羅が、台無、しに、なる」

私は辛うじて開放された。そのあとも、フランは空気を相手に握力トレーニングを繰り返す。「試作四号機の組み立ては延期するわ……このままじゃフォオオブスクラップが完成しちゃう」「動かすときにフランが顕微鏡から離れてれば、原因かどうかはつきりするんじゃないかしら」私とフランが、いつせいにこいしを見る。

「……拒否する。それじゃ製作者の私が近づけなくなっちゃうじゃないのよ」

「じゃあ、どうするんだ？ 延期じゃなくて休止か？」

しかしフランは、ブンブンと首を横に振った。そのまま机に向かい、椅子を引く。

「かくなる上は、意地でも潔白を立証してやるわ。私自身の手で！」

そして羊皮紙の束とペンを手に取り、猛然と術式を描き出した。

うーん、三百ページとは言わんが、正直あと七四ページくらいのドキュメンタリーになるな。

§

それから半日ばかり、フランは机にかじりついたまま離れなかった。

こういうときのフランはなにやってるか話さないし、口出しするとマジ切れする。私にできることはせいぜい研究室の掃除と、実験体に新しい病人が出てないか見て回ることくらいだ。

え、残った一人はなにしてんのかって？ ああ、いたなそう言えば。あいつはまあ気まぐれだから。こういうときに、真面目になんか手伝ってた記憶がまるでない。

さておき、フランの部屋に戻ると肝心のヤツが机にいない。さては行き違いにでもなったかと思っていたら、部屋の奥から物音がした。フランのプライベート厨房がある場所だ。

しばらくして、フランが厨房から出てきた。サンドイッチの入ったバスケットを三人分ほどかついでな。テーブルの上にそいつを並べて私を見た。

「食べる？」「うむ」

向かい合って紅魔館メイド長謹製のローストビーフが挟まったそいつを食す。その合間も、フランは眠そうな薄目を開けて、何事かつぶやいていた。小声だし意味不明だし、口にもが入ってる間もお構いなしだし、まあ聞き取れん。

食事が終わるや、空になった三つのバスケットを厨房に片付け、机に戻る。その間に私は、どうにかフランに言葉を投げかける機会を得た。

「どうよ、調子は」「まあまあ」

そうしてフランは机の上から資料を退け、広いスペースを作った。そこから奇天烈な作業を始める。書き物は書き物なのだが、空気がこれまでの半日とは明らかに異なっていた。机と頭とを舌を出せば舐められる程度に近づけ、人差し指と親指のわずかな動きだけで何事かを書き込んでいた。よく見りゃ紙のほうも親指の頭くらいの大ささしかない。

「……あー」

なんか天井を見上げた。今まで描いてたやつを放り捨てて、新しい紙を鉄で切り取る。いったいなにを描いているんだ？ 今しがた捨てられたやつを拾い上げてみた。

そいつは、紙相応に極小サイズの魔法陣だった。丸に三角、その中に米粒よりも小さな文字。こんなもんを作って、どうしようってんだか。

悪戦苦闘は、さらに二刻ほど続いた。フランはようやく完成したそいつを掲げ、大きく息を吐き出した。ピンセットを使って震える手で透明シートに収める。

さらに、そいつを抱えて研究室へ向かう。修理中の試作四号機へ取りつくと、保護ケースにさつき描いた魔法陣を投入。手袋の上からピンセットを使って、ステージにそいつを乗せる。

「……よし」

「なにを始めるつもりだ？」

ぐいと袖をつかまれた。そのまま四号機からどンドン離れ、ついには研究室の外に出る。

「まだ、準備は終わってないわ。ここから先にはあんたにも手伝ってもらわよ」

§

床の上には、前もってチョークで描かれた枠がある。

私はそいつの上に、ローラーを走らせる。細かい部分は刷毛を使って、ちまちま塗り潰す。そろそろ左官職で生計立てられるような気がしてきた。

一文字終わったところで周りを見回してみた。エントランスホールではカインドたちが屈みこんで、私と似たようなことをやっている。フランがあくせくチョークで書き込んだ魔法陣の下書きを、清書する作業をだ。

「なあこれ、いいのか」

「咲夜の許可は取ってあるから心配なし。いいから手を動かして」

メイド長がよくても、お嬢様が止めろって言ったら終わりの気がするんだけどな、これ？

そもそも私の疑問は、なぜこんな馬鹿でつかい魔法陣を描く必要があるのかってことなんだが。

極小魔法陣の次は、特大魔法陣か。ギネスにでも挑むつもりなのだろうか。

私はぼやき節をBGMにして、一刻ばかり過酷なペイント作業を続けた。するとどうにか、謎の巨大魔法陣にも完成が近づいてきたのだった。

フランはホールを飛び回って、魔法陣の出来栄を確かめた。ヤツはようやく満足すると、その中心に降り立ちカインドどもに告げるのだった。

「ご苦勞様。さっそくだけどあなたたち、準備に取りかかってちょうだい」

「了解」

三人がパタパタとホールを去った。残ったのは私とフランの二人……のはず。

「そろそろ教えてくれてもよからう？ この魔法陣の正体がなんなのか」

「うむ、いいでしょう……これより我々は、故障調査隊として顕微鏡の内部に赴く！」

オモムク！ とよく手入れされたホールがエコーを返す。

「……いよいよ本格的にあっち側へ踏み込んだか」

「私は十分に正気だわ。これまでの準備は、その伏線よ。視界を魔法で拡大縮小できるんなら、もっといろいろなものを拡大縮小できるんじゃないかと思ってね」

「いろいろなつてーと、その、つまり……？」

私の神経はだいぶんすり減ってた。長い時間、不毛と思えた作業に付き合わされすぎた。

「さっそく実験してみるわ。カインド、配置には着いていて？」

と、フランが視線を泳がせている。たぶん念話のたぐいだ。そうしてしばらくカインドと話をすると、私に向き直った。

「カインドに指示して、魔力の装填を開始したわ。あちら側の『召喚陣』の発動に連なって、こちら側の『召還陣』も動き出す仕組みになっているの」

ほう、と、私らの周りの魔法陣が、青白い光を放ち始めた。

「……念のため聞いておくが、どこから、なにを、喚ぶつもりなんだ？」

「そりゃー当然。ここから」

「うん」

「私たち自身を召喚する」

魔法陣が放つ光がよいよ鋭くなり、私たちを包み込んだ。なんか浮き上がるような感覚。確かに地面に足はついてるはずなのに。

そいつが収まると、周囲の景色は一変していた。

エントランスホールの壁は、どこにも見当たらない。代わりに薄暗く、果てしない琥珀色の空間が広がる。それから足元は硬い大理石の代わりに、なんか白くて弾力のある太いロープのようなものが複雑に絡み合っていた。頭の上には、とにかく大きな円盤みたいなものが見える。

……なんかどっかで見覚えがあるな？

で、私の横ではフランドルがふんぞり返っていた。

「あつはつは！ 縮小召喚術は成功したわ！」

「縮小、召喚術？ つまり、なんだ。ここは」

「研究室の中に決まってるじゃないの。上に見えるのが試作四号機ね」

私はゆるゆると、上空の円盤を見上げる。

あー、なーるほどー。あれは拡大鏡の先っぽかー。道理で見覚えがあったわけだー。さんざ組み立てを手伝わされたもんなー。

「私たち自身が幻想の存在であるならば、極小サイズの姿で現実存在することも理論的には可能であったということね。私たちがこの場にあることが、何よりの証拠だわ」

「……とりあえず質問いいすか」

私は右手を挙げた。悦に入ったフランの視界をなるべくさえぎるように。

「私らで実験する必要は？」

「なんでもかんでもミクロサイズになっちゃったら、今のところ確認の手立てがないじゃない。それなら私たち自身がミクロ化するのが、いちばん手っ取り早いでしょ？」

「……失敗したらどうするつもりだった」

ホムンクルス培養槽の駆動音が、はるか遠くから聞こえてきた。

フランはそれからさらさらにはばらく経って、かたん、と首を横に傾けたのだった。

「もう少し悩んでから実行しろ！ どうすんだよこれ、戻れんのか！」

「大丈夫よ、カインドに召喚し直してもらえれば戻れるから。もしもしー？」

と、再び念話でカインドと話し出す。向こうの声は残念ながら聞き取れん……が。

「え、マジ？ 再装填までどんだけ？」

会話の内容がまるつきり不安しかないのはアホでもわかる。

「うん……うん、わかった。ゆっくり休んでちょうだい」

フランは念話を終えると、私に笑顔で向き直った。

「戻る前にちょっとミクロの世界を楽しんでいくつもりはない？」

「ない」

「まあそう言わずに」

「その前に『再装填』とか『ゆっくり休む』とかいう不穏なワードについて詳しく」
くるり、と、フランが私に背を向けた。

「飽くなき知的好奇心の前には、いかなるインシデントも些末な事象となり果てるわ」

「かっこいいこと言おうとしてごまかそうとすんじゃない！」

フランの背を追いかける。足元……たぶん羊皮紙の繊維質……に深く沈み込む感覚があり、
うまく走れない。

「おおかたカインドが、想定より魔力を消費したとかならう！ 何時間くらい待ってりゃ」

空が薄暗くなった。この実験室の中で、雲が出ることなんてあるのか。そう思っ上を見る。
どす黒いなか、私らの真上から落ちてくるのが見えた。

「走れ、フラン！」

「え」

私はフランの腰を抱えて、全速力で飛んだ。同時に、ドスン、と巨大な影が真後ろに落ちた。

「なんだ!？」

そいつは一瞬、不定形のタールみたいな塊に見えた。うねりを上げて節足を何本も生やし、
巨体を持ち上げる。赤い単眼を何個も持った、虫とも獣ともつかない怪物。

「なんだ、こいつは！」

「どうもこのサイズになって可視化された、細菌のたぐいみたいねえ」

「冷徹に分析してる場合じゃねーぞっ！」

細菌？ が脚を振り回す。巨木が飛んでくるかのようだ。ズシン、ズシンと私をかすめる。

「どうすんだ、これ！ やっちまうか？」

「そうねえ、こういうたぐいを駆逐するのが本来の目的だし！」

フランは私の腕を抜け出ると、歪んだ杖を実体化させた。そいつは見る間に紅蓮の炎を吹き上げ、恐るべき魔剣へと姿を変える。

そいつを縦方向に一振りする。抜群な切れ味を誇るレーザーカッターだ。細菌？ の巨体が、あっさりと二つに分かたれた。

しかし、様子がおかしいとすぐにわかった。魔剣で切り裂かれた断面には、体組織のたぐいがまるで見つからない。それどころか、体液の一つも流す気配すらない。

そしたら、断面から新しい脚が生えてきやがった。化け物が二匹になったんだ。

「なんだ、こいつ!？」

「相手が悪いわ。こいつ群体よ」

隣からフランの声。見ると魔剣をかついだまま、えらく歯ぎしりしている。

「グンタイ？ なんだ、そいつは」

「たくさんの小さなものが群れをなしてあの形を作ってるってこと。あいつ、破壊の目が無数

にあるわ。これじゃいくら『きゅー』としてどかーん』しても、壊しきれないわ」

空いてる右手を、わきわきやった。パン、パン、パンと化け物の表面で小さな爆発が起こる。でも、それだけだった。まるで効いちゃいねえ。

「倒すなら、全部をいっぺんに殺さなきゃならんってことかい……」

「ぬえ、あんたなんか都合のいいスペカ持ってない？ レーヴァテインでちまちま切り刻んでたら、いつ終わるかかわかんないわ」

「こういうのは白黒魔法使いが得意そうなんだがな……」

戟を立てて、念じること数秒。我が左右非対称の両翼が発光し始める。

「巻き添え食わないように、下がってな」

翼より、無数の矢が放たれる。そいつらは放物線を描いて怪物に向かっていくと、さらに多数の矢へと別れていった。矢の豪雨が怪物の頭上に降り注ぐ。

フランはそいつを私の隣から見下ろす。

「これはこれで、ずいぶんと時間がかかりそうだわ」

「手持ちのスペカでいちばん弾幕密度が濃いものっていったら、この『頼政の弓』が上限だよ。なんなら手伝ってくれてもいいんだぞ？」

頼政の弓矢が怪物を貫いている。が、ヤツら貫いたその先から、もりもり穴を治していた。こんなんじゃないわ、何時間かかるかもわかりやしないな。

が、拳を地面に叩きつけていた。拳の先には、まとめて叩き潰された怪物の成れの果てがある。私らはそいつの近くに降り立った。

「……まさかあんたが来ていたたあな」

「久しいな、封獣」

伊吹萃香は顔を上げると、私に向けて歯を見せて笑った。拳を持ち上げ、指先にこびりついた怪物の残りかすをべっぺと払い落とす。それと一緒に、むせ返るほどの酒臭さが漂ってきた。「お前、最近ちょっと見ないうちに腕が鈍ったんじゃないのか？ これしきのやつお前なら、あつという間に仕留めちゃうだろうに」

「それはなあ……」

私が答に迷った。その隙に、フランが萃香に詰め寄っていく。考えなしめ。

「ちよつとあなた、何てことしてくれるの。召喚陣が壊れたら帰れなくなるじゃない」

……ん？ そういえば。フランの理論が確かならば、この場所は観察ステージに置いた極小魔法陣の上ってことになるのか。ものの見事に壊れまくつとるけど。

しかしテロリストは悪びれない。ゆるりと首を動かし、フランに細めた目を向ける。

「んー？ 誰かと思えば引ききもってるほうの吸血鬼お嬢ちゃんじゃないか」

フランは片目を細める。

「あなた、私のことを知ってるの？」

「そりゃー、私は幻想郷にいるあらかたの妖怪のことを見ているからねえ。お前がそこいらのフラフラしてる連中を部下にしてヘンテコな研究をやってることも、当然知ってるよ」

杖を握る手に力がこもるのが見えた。私はとっさに二人のやりとりへ割り込んだ。

「真面目に取り合はんほうがいいぞ、フラン。伊吹はな、鬼の中でもとりわけインチキじみた力を使うんだ。この場にいるのもその一つと言っている」

幸い、そいつはフランの耳に届いた。人差し指をこめかみに当てて首を傾ける。

「そういや、そうねえ。なんであなた、このスモール・ワールドに普通にしているわけ？　いつの間にお屋敷へ忍び込んだのかしら」

「私がそんな、泥棒みたいな真似をするわけがない。私の中にお前らがあっただけだ。だから侵入者は、むしろお前らのほうだ」

ゆっくりと萃香が腰を上げる。立ち上がってなお、フランとどっこいの体軀だ。

しかし酒の匂いとともに、半端ない威圧感が突き抜ける。フランが半歩、引き下がった。

「ここは私の世界だよ。命惜しくば、即刻出ていってもらおうか」

「出ていこうにも、たった今あなたが出口を壊しちゃったわ？」

「それじゃ、私に仕留められる以外に道はないなあ」

やれやれ、やっぱりこうなるのか。フランも杖を構え直してやる気十分だ。

「弾幕ろうつてのね？　望むところだわ」

「まあ、落ち着け。さつきから言ってるだろう？　ここは私の世界だと。つまり決闘の方法も、私が自由に決めていいってことさ」

面倒くさい予感しかない。まあ無視するわけにはいくまいが。

「いつにも増してまだるっこしいな。なにでケリをつけようってんだい」

「そうさなあ、鬼ごっこはどうだ。ちようどここに鬼もいることだし」

萃香が親指でトントン自分を指差す。

「鬼ごっこねえ」

「これから一日のうちに、私を捕まえてみせな。そしたら領土侵犯を不問にしてやろう」

フランが肩をすくめて両腕を広げる。

「鬼の役割が逆じゃない？」

「細かいことは、いっつ子なしだ。もしも捕まえられなかったら、生殺与奪の一切を私に委ねてもらうからな」

ドン、と萃香が飛んだ。わずか一歩で数十メートルの距離開く。

「適当に百数えてから追いかけてきな。最初に言っとくが無気力プレイは許さんからな」

その言葉を最後に、萃香はたどたどしい足音を残してその場から消えた。

私らは無言でそいつをしばらく見送ったのだが。

「……付き合うかね？」

「何考えてんの、あいつ」

「鬼は基本的に、勝負ごとが大好きな妖怪だからな。いろいろかこつけて、勝負を仕掛けようとするんだ。適当に相手してやらんと、本当に仕返しに来るぞ」

フランは杖を肩にかついでトントン叩く。

「しゃーないわねえ、とっとと捕まえて召喚陣の修復を手伝わせてやるわ。カインドは置いてきちゃったけど、手数は必要かしら」

「その点は心配いらん。大規模搜索は得意分野だ」

我が指先から黒い汚泥めいた、正体不明のタネがしたたり落ちた。

§

(以降「偽者の脳内」にてご確認されたし)



紅魔館連続殺菌事件

書き下ろし

こいここ
失踪事件



私たちは息をひそめ、そいつが戻ってくるのを待った。

場所は霧の湖にほど近い、小山に穿たれた洞穴の前。ご丁寧にも扉がすえつけられて、一丁前にも錠前までついていやがった。

「じゃあなー、明日も覚えてたら遊ぼうぜー」

そんな能天気な声が遠くから聞こえてきて、この洞穴の主が戻ってきた。背中に氷の羽根を生やした、異様なやつが。

その妖精、チルノは洞穴の前で立ち止まると、腕組みして何やら考え込む仕草を見せた。

「おかしいなー、最近どうも調子が出ないや。日焼けもいつの間になくなっちゃったし」
ワンピースのポケットを探り、鍵を取り出す。

「なんか少し前のあたいは無敵のパワーに満ち溢れてたわ。きっと疲れてんだわ。がつつり寝たら明日からまたひと暴れしてやるわ」

ガチャン、と錠前が外れる音と同時に、私たちは行動を開始した。私ともう一人、黒いドレスの女がチルノの両脇を固めて扉からひっぺがす。

「ななな、なんだなんだ？ 賊かお前ら」

「偉いな、だいたい合ってる」

鍵の開いた扉の前にもう一人、紫のマントを羽織った女が降りておもむろに中へ入り込む。

「ちょ、人の家に入り込んで何しようってのさ」

「目的のものが見つかったらすぐ解放してやんよ。つかぬ事を聞くがお前、これつくらいの大きさの茶色い石ころを持ってないか？」

私はチルノの目の前で握りこぶしを作った。

「そんな知らないよ。そこらにいっぱい転がってるから拾って帰ればいいじゃないよ」

「では……お前の家ん中からそいつが出てきても、持ってって問題ないってことだな？」

扉から再びマント女……豊聡耳神子とよさとみみが顔を出す。

「土用が見つかったぞ。ガラクタの中に埋もれていた」

マントが持っていたのはまさしく握りこぶしほどの茶色い石ころである。この一見無価値なオブジェが私らの探し物だ。

「返せ。あたいの家にあつたものなら、大事なもんだ」

「それにしては保管がおざなりだし、知らないって言ってたな」

「わ、忘れてただけだもん」

ドレス女こと聖白蓮ひじりびやくれんが、チルノに声をかけた。

「ごめんなさいね、目的を果たしたら必ずお返ししますから。あとで命蓮寺みょうれんじにおいでくださいな。借用費の代わりと言ってはなんですがとびきりのお菓子を振舞いますから」

「お菓子！ あたいはそんなにカイジューされるほど安くないぞ」

「今都合できそうなものといったらお萩に水羊羹にどら焼きにそれから」

「全部くれるなら貸してやらんこともない」

安いな、こいつ。

「それじゃあ、取引成立ってことで。おい、ちゃんと撮ったな天狗！」

「ばっちり撮らせていただきました」

近くの茂みが鳴って、烏帽子を頭に乘せた女が姿を見せた。

「お望みの記事ネタは提供してやったぞ。これで土用を貸してくれるんだろうな？」

「ええ、きちんと返していただけるのなら。あの神にはまだまだインタビューしたいことが山ほどありますのでね」

烏帽子こと射命丸文が、私に石ころを投げてよこす。

「どんな記事に仕立てるのはかは知らんが、ほどほどに頼むぞ。私は下げられるのには慣れているが、あの二人がどうなのかはわからんからな」

チルノをなだめる白蓮と神子を指し示す。

「約束が守られなければ、スキャンダラスな記事が仕上がることもあるかもしれないね。ちゃんと返してくださいよ」

「善処はする」

やれやれ。強盗まがいのことをする羽目になるわ天狗に貸しを作るわ、わりと大ごとになっちゃまったな。「土用」を借りるのに巫女にも頭を下げる羽目になったし。

どうして私こと封獣ぬえが、白蓮や、対立してるはずの神子とこんなことをしてる羽目になってるのか。数時間前に遡ってあらましを説明せねばなるまい……。

§

フランドール・スカレット、以下フランはその日も不機嫌だった。

「最近、こいしが遊びに来ないわね……」

場所はフランの研究室と自室を兼ねた紅魔館こうまかんの地下室。机の上には乱雑に散らかった羊皮紙が数枚。へんてこな記号がいくつかならんてるばかりで、残りはみんな真つ白だ。

「そりゃね。一人でやってきた時間のほうがずっと長いわよ、正直。でもいきなりいなくなったら調子狂うでしょうに。やっぱり、あいつのほうがいいのかしらね」

シニヨンキャップを引き裂きそうな勢いで頭をかきむしる。

「くっそあの仮面オバケめ……公式で絡みがあったからって調子づいてんじゃないわよ……あんたが出てくる前まではこいフラが主流だったんだから……」

メタなことを呟いても苛立ちは収まらない。こいつがフラストレーションを持って余すのはいつものことだからな。煮え湯をさらに火にかけるようなもんだ。沸騰しきっている。

「いつそ私のほうから出向いてあげようかしら……ここいらで一つどっちが格上なのかをあい

つに思い知らせてやらないと」

背後で不自然な物音がしたのはそのときだった。何か重いものが、フランのすぐ背後に降り立つようなそんな音だ。

ハッとなって、振り返る。

「こい……」

残念ながら見えたものは、目当てのヒロインじゃなかった。代わりに見知らぬ何か二人ばかり、床の上に転がっていた。

「はい？」

不条理な登場だった。そいつらは何の気配もなくフランの背後にいきなり現れたのだ。両方ともなんの特徴もない、人間の少女に見える。一人はおかっぱ頭の茶髪、もう一人はアップにまとめた黒髪の。小綺麗な和服を身につけており、育ちは悪くなさそうに見えた。

「咲夜かしら？ また変な手品でも思いついたの？」

メイド長十六夜咲夜の返事はなかった。確かにこういう不自然な現象を起こせるのは、紅魔館の中じゃ時止めを使うあいつくらいだ。

新しい餌ならきちんと「調理」して持ってくるだろう。自分でやってやれないこともないが、姉がそういうのをあんまりやらせたがらない。

では新しい「玩具」のたぐいか？ それにしちゃ本当にあんな人間すぎる。妖怪退治などや

る人間だったら体のまわりに多少は「魔力の流れ」みたいなやつを感じ取れるものだが、そういうものも全くない。

じゃあ、なんなんだよこいつらは。正直フランにとっちゃイライラ煮えたぎった頭の上にゴミを投げつけられたようなもんで、全然面白くない。もうちよっと温度が高かったなら、なんも考えずにこの可愛い投棄物を「きゅっとしてどかーん」してるところだ。

幸い、フランはそいつを思いとどまった。近づいて様子を見るに、血色がある、呼吸もしている。要するに死体じゃない。

なら、本人たちに直接聞いてみるのが手っ取り早いとフランは考えたわけだ。

「起きなさい、あなたたち」

両方の頬に手を伸ばしてびたびたやった。しばらくして二人が身じろぎした。薄目を開けて、ゆっくりと体を起こす。

「ようこそ。吸血鬼の館の、そのまた禁忌の地下室へ」

二人はフランを見上げるや否や、目を丸くして数歩ぶんを後ずさった。日本人離れた金髪と赤い目、それから人間離れてか生物離れた七色に光る翼を見れば普通はそうなる。

「その様子だとろくに妖怪も見慣れてませんって感じね？ 私はフランドール・スカーレット。この紅魔館の、主人の妹。あなたたちの名前は？」

そいつらはしばらくの間、酸欠の金魚みたく口をパクパクさせていたのだが。声を出したの

は茶髪のほうが最初だった。

「こ、こは、どこですか」

「答えになってない上に全然話を聞いてなかったわね？　もう少し大きなくりで言ったら、ここは幻想郷よ。あんたたち、どこから来たの？」

黙り込んでしまった。頭を抱えて、うめき声みたいのを上げている。

「あ、あの」

そこで黒髪のほうが、口を開く。

「僕はいつたい、誰……？」

フランは理解に数秒を要した。

「……は？」

§

一しきりの質問を終えると、フランは人差し指で頭をツンツンやった。

「名前、家族、住んでた場所、一切覚えてない。ひっかけ問題にも反応しない。まさかだけどあなたたち、悪魔を騙そうって魂胆じゃないわよね？」

女二人は首を振って必死にそいつを否定した。

「記憶喪失ってやつだ。まずまず私のところに寄越された理由がわからないわね。あんたたち、素性はどうあれ吸血鬼の館に生身で現れた以上何されても文句は言えないわけだけれど」

二人が後ずさる。

「……ただの人間を玩具にして遊ぶほど私は退屈してないし、サドでもないのよね。というわけで、お姉様に処置を談判するわ。カインド、この子たちを連行なさい」

ぞろぞろとフランの分身どもがより来たって、恐怖に震える二人組の両脇を抱え上げた。総勢六人が地下室を出て階段を登りきったところで、見えてきた影がある。

「あなたも懲りないこと。喘息の加減がよいパチュリー様に殺されなかったことを喜ぶべきね」
「飽くなき探究心の前には困難が立ち塞がるもんだぜ」

そんな話をしながら歩いてるのは、手を後ろに回した黒いとんがり帽子の女と、その背中にナイフを突きつけたメイド長だった。当然、その二人……霧雨魔理沙きりさめ まりさと十六夜咲夜もフランたち

ちに気がついたのだが、その反応は奇妙なもので。

「あら妹様。新しいお友達ですか？」

「ん？ 里乃と舞じゃないか。また何かやらかしたのか？」

「え？」「え？」「え？」
三者三様の疑問符が飛び交う。咲夜が部外者の侵入を把握してないのも珍しいことだったが、何より魔理沙の口から女二人の正体が飛び出てきたのが意外だった。

「里乃と舞って……この二人組のこと？」

「ああ、おかつぱが爾子田里乃、上げてるほうが丁礼田舞……って、お前ら、まさか舞、と呼ばれたほうが反応する。」

「それって、僕らの名前？」

「あー……なるほど」

察したみたいな顔をして、魔理沙はつかつか歩き出した。フランが速攻でダッシュをかける。「おいこら、逃げようとすんな本泥棒。詳しく話を聞かせなさい」

§

「そいつらは摩多羅の部下だ。見間違いないよ」

魔理沙の言葉に、里乃と舞がいつせいに首を傾げた。

「ま、た、ら？」

「……やっぱりそれも覚えとらんか」

「とりあえずこの子たちはほつといて、私たちにわかるように説明してもらえん？」

「この前起こった四季異変……もとえ、後戸異変の首謀者の名前が摩多羅ってんだ」

魔理沙はフランに異変の顛末を語って聞かせた。後戸の国に住む幻想郷の賢者にして秘神、

摩多羅隱岐奈。彼女が幻想郷の片隅に隠れ住む妖怪どもに力を与えたことで起こった異変だ。

「摩多羅が部下として使ってたのがその二人なんだが……だった、というのが正しそうだな」
「クビになっただってこと？」

里乃と舞は依然として要領を得ないといった顔をしている。

「摩多羅の目的は幻想郷の賢者、例えば紫とかだな……を始めとした幻想郷の住人に、自分の力をアピールすることだったんだが、裏では新しい部下を探してみたいでな。意欲のありそうな人間に目星をつけて、定期的に入れ替えてるらしいんだよ。断ったが、私も誘われた」

「仕事って、何をするの？」

「簡単に言えばバックダンサーだな。元気がないやつの背後にこっそり現れて、そのまま後ろで踊る。そうやって幻想郷のバランスを保つ。隠岐奈はフィクサーなんて言葉を使ってたが、安請け合いしちやいかん仕事なのはこいつらを見れば明らかだな」

魔理沙の目に哀れみがかもる。

「摩多羅は人間を部下に取り立てるにあたり、記憶と人格を都合よく書き換えるらしいんだよ。私は確かにこいつらとも戦ったはずなんだが……お役御免になったこいつらは私の顔はおろか、摩多羅のことすら覚えてないときた」

「まさにボイされたってわけね」

「しかもその出先が紅い館の地下だけ。知っててやったんだとしたら、相当に悪質だな」

「ブラック加減じゃこも負けたもんじゃないけどね。それでその二人が今記憶を消されてここにいるってことは」

「ああ、多分摩多羅は代わりを見つけたんだ。どこのどいつか知らんが、気の毒にな」

「何もわからず放り出されたこの子たちもたいがいだけどね。咲夜、ひとまず里に送ってあげたら。運がよければ誰かに拾われて、人間として余生を……」

ここでフランは固まった。魔理沙の説明に出てきた言葉が、頭の中で引っかかったのだ。

「……ねえ魔理沙、あなたさっき言ってたわね？ 摩多羅とやらの部下は、誰かの後ろでこっそりと踊るって」

「ああ。踊られたやつが全く気がつかんくらいにこっそりとな」

フランは口元を押さえたまま、ゆっくりと魔理沙の顔を見上げた。

「私、知ってるわ。そういうことをやるのにおあつらえ向きの能力を持つてるやつ。誰にも気づかれずに、誰かの背後に近づけるやつ」

魔理沙は一瞬怪訝な顔をしてフランと同様考え込み、そして、顔を上げた。

「……あいつか！」

同じころ、私はといや人里にいた。

聖白蓮が所用で出るがというので、暇つぶしがてらこの私が着いてきているというわけだ。もちろん正体不明を操るこの私が、妖怪であることをばらすようなへまなどしない。正体不明のタネを自分自身に植えりゃ、ただの小僧にしか見えまい。

「あなたをのんびりさせるために、着いてくるのを許したわけではありませんよ？　一輪も水蜜も別の用事で手が離せないからです。命蓮寺の者としての行儀をわきまえられないのなら、先に帰ってもらうことになりませよ？」

「わーってるって……とところで白蓮よ、ずいぶんとこの『家庭訪問』は頻繁にやってるんだな？　少々肩入れが過ぎるんじゃないかい？　あんたとしちや」

「そうでしょうか……？」

白蓮は、笠の下で人差し指を口に当て思案にふけた。少々天然が入ってるのは否めないの
で、私らもよく引っかけ回される。

「以前のように異変を起こすほどではないとはいえ、こころさんは依然として不安定ですからね。時おり様子を見てあげないと心配です」

「他の有象無象相手にゃ、そこまで手厚くはやらんだろう？　なんつうか、例の妖怪に対する白蓮の振る舞いはあれだ、人間の母親みたく見えるよ」

「例えとしてそれが正しいかどうかはわかりかねます。人としては生涯独身でしたし」

感情を操る面霊気にして「心綺楼異変」の発端、秦はたのこころは人里の外れに一軒家を構え、そこで人間に紛れて暮らしている。祭事のために人々へ能楽を披露するこころの姿は里人にとつて馴染みが深く、里人の中に能面をつけたカボチャスカートの女が混ざってとてもとくに疎まれずに済んでいるというわけだ。

そのこころの家はこぢんまりとした一軒家だった。里の人間に善意で貸してもらったものらしい。人気者はいろいろと得だな。真似したくてもできやしねえ。

「こころさん？ 白蓮です」

カツカツカツと引き戸を叩くが、返事がない。

「おかしいですね、この時間は家にいらっしゃるはずなのですが」

「おや、白蓮様ではありませんか」

そこで、背後から好々爺然とした男が私らに声をかけてきた。

「これは里役さん。お疲れ様です」

「白蓮様がたもこころさんに会いにきたのですかな。留守ですか、おかしいですな」

「と、いうと？」

里役のジジイが目尻を下げる。

「実は里の大祭に合わせてこころさんにも能楽を披露していただきたく……本日打ち合わせの予定を伝えておいたのですが、一向に会合へ現れませんで、様子を見にきた次第です」

「なんですって？ それは、大ごとです」

と、この僧正速攻で断定しやがった。里役への挨拶もほどほどに、元来た道を引き返しにかかる。駄目は承知で白蓮をたしなめてみるが。

「たまたまど忘れしてるだけかも知れんぞ。決めつけるにゃちと早すぎないか」

「純朴なころさんが約束を違えるとはとうてい思えません。取り越し苦労ならそれでもよし、そうでないとしたら一刻も早く手をつけるべきです。ひとまず心当たりを……私は太子廟へ行ってきました。ぬえさんは神社を見てきてもらえますか？」

「あの仙人にまで知らせんのかい……」

私はそうそうに白蓮の説得を諦めることにした。いつものが始まっちゃまったんだ。この僧正は自分の正義を曲げた試しがない。性善説のオバケみたいなやつだ。

仕方がない。こころとはまるで縁がないが、テキストに探すふりだけはしておこう。そのうちぼろっと姿を現してなんだ勘違いだったのかハハハとなっておしまいだ。

そのときはそう思ってたんだ。いったん命蓮寺に戻った私らと、紅魔館のほうから傘をさした人影を引き連れて文字通りすっ飛んできた箒の魔女とが鉢合わせになるまではな。

(以降「偽者の脳内」にてご確認されたし)



こいここ失踪事件

初出 Unknown Girls 2

(二〇一七年九月)



2784545018031



2920193010007

狂気の妹フランドール・スカ
レット。ある夜ヤツに紅魔館へ拉
致られた私こと封獣ぬえは、古明
地こいしと共に怪しい研究に付き
合わされている。フランはどうい
うわけか、自分の「友達」を作る
ことに熱意を捧げていた。あると
きは魔法の森の人形遣いと技術交
換、あるときはミクロの世界で大
騒ぎ、そして――。

二〇一七年に頒布したコピー誌
「森の三魔女自我を語る」「こい
こ失踪事件」に加え、書き下ろし
の表題作「紅魔館連続殺菌事件」
を収録。一八〇ページまるまる妹
様の狂気^ドに振り回され続ける短編
集です。